2011年度 政治経済学（20日配布の改訂版）

小倉利丸

ogura@eco.u-toyama.ac.jp *

2011年10月20日

3 価値形態と貨幣の生成

3.1 概観

市場経済の交換は、物々交換ではない。商品は貨幣の所有者による購買行動を通じて「売られる」ことになる。だから、貨幣を論じないことには市場の売買関係を論じたことにはならない。今回以降、貨幣について論じ、市場の売買の基本的なメカニズムを説明する上で必要な最低限理論的な環境を準備するが、以下で述べるように、とりあえず「物々交換」モデルから出発して貨幣の必然性を説明する。

貨幣は、私たちが物心がついた時にはすでに当たり前のようにして生活の中にあり、あえて「貨幣とは何か」などと問う必要もないくらい「よく知っている」もだと思っている。しかし、「貨幣とは何か」という問いは繰り返し経済学で問われ論じられてきたのであって、決して容易な問題ではない。このことは、商品がありふれた市場経済的な財やサービスのあり方であっても、子細に分析すると厄介な性質を持っていることがわかるのと同様である。

マルクスの貨幣論は、貨幣の理論的な起源を商品に求める（商品貨幣説と呼ぶ）。商品貨幣説では、商品交換（物々交換）をとりあえず想定し、実際の市場経済では商品と商品が直接交換されることはなく、なぜ貨幣が商品交換を媒介するのかを、商品の物々交換モデルから導き出そうとするものである。^{*1}この商品から貨幣を理論的に生成する理論的なプロセスを「価値形態論」と呼ぶ。マルクスの経済学説のなかでももっとも難解な箇所といわれている。難解な理由は、論理の構造がヘーゲルの弁証法に由来しているからだとも言われている。この講義では、こうした方法の哲学的な前提には触れない。むしろ、市場経済の基本的な性格を理解するために必要な限りで、概要を説明するにとどめる。今回は、この点をふまえてさらに貨幣に関して、下記のような論点を説明する。

上記に加えて、もう一つのマルクスの貨幣論の特徴は、「フェティシズム」論という特徴的な観点をとっている点である。札束を前にして快樂の笑みを浮かべる億万長者といった風景に典型的なように、たんなる「紙

* 主として3.3の単純な価値形態の記述を補足しました。後半部分で上着とリネンが逆に表記されているという間違いを訂正しました。「解らない」のは私のプリントの間違いのためです。お詫びして訂正します。携帯 070-5553-5495

^{*1} 古典派のアダム・スミスも商品貨幣説である。物々交換の不便さを解決するために、交換の便宜として貨幣が必要だというのがスミスの説明である。マルクスもこの主張を導入するが、しかし貨幣を単なる交換に便利だから、というだけには収めていない。貨幣はもっと複雑で謎めいている、というのだ。

切れ」をなによりも大切なものとして愛でる人間の欲望や、モノが「商品」となることによって、モノにはない「価値」という性格がもたらされることなどを、「フェティシズム」という概念を用いて論じた。

これらの議論をふまえて、貨幣の機能が論じられる。貨幣は価値尺度、流通手段、退蔵貨幣、支払手段（信用制度に伴う貨幣機能）、世界貨幣（世界貿易での貨幣の役割）など、貨幣が市場経済で演じる機能を分析する。この分析の前提に置かれている貨幣とは、「金貨幣」である。実物の貴金属（主として金と銀）を貨幣とする市場経済の長い伝統をふまえて、金を貨幣とすることを基本として説明しているが、同時に、紙幣のような国家によって強制的な流通力を与えられた貨幣や、実物としての価値をまったくもたない記号としての貨幣などについての言及もみられる。現在の市場経済における貨幣は、こうした金貨幣以外の貨幣が支配的であるから、国家紙幣や記号としての貨幣についても論じる。

マルクスの貨幣論の時代は19世紀のイギリスを中心とした資本主義経済（経済学の基本的なパラダイムはこの時代に確立したので、マルクス経済学に固有のことではないが）であって、貨幣のあり方も現在と大きく異なる部分がある。しかし、貨幣が本質的にもっている資本主義経済での機能と私たちの精神性（欲望の構造）に關与するあり方という点については、基本的に共通する点がある。逆に、現在のようにほとんどが国家紙幣（中央銀行が発行する銀行券と政府が発行する硬貨）に支配されている市場経済が、どのような不安定性をもっているのかを知る上でも大変示唆に富む議論が展開されている。

3.2 価値形態または交換価値

まず、以下の引用から。前回講義した労働価値説についての基本的な考え方が端的に示されている。

商品は、鉄、リネン^{*2}、小麦、等々のような使用価値または商品身体の形をとってこの世に登場する。これは彼らの生まれながらの実物形態である。とはいえ、それらは使用対象にして同時に価値の担い手であるという二重体であるがゆえにのみ商品なのである。

商品は人間労働という同一の社会的単位の表現であるかぎりでのみ価値対象性をもち、したがって商品の価値対象性は純粹に社会的であることを想いおこすなら、価値対象性は商品と商品との社会的関係のなかでのみ現れることができる...^{*3}

商品は交換されてこそ商品としての社会的な存在意義が確証される。言い換えれば、商品として生産されながら売れ残れば、その商品は社会的には不要のもの、社会的には無意味な存在であったということになり、このような売れ残りの商品を供給するための様々な経済活動もまた社会的には意味のない活動でしかなかったとみなされる。商品がその意味を実現できるのは、交換を通じて、その商品を必要とする人の手に渡ることによってである。この交換は、様々な商品の交換を媒介する「共通の価値形態」としての「貨幣形態」を通じて実現される。

この価値形態としての貨幣形態の生成を以下説明する。

^{*2} リンネルともいう。亜麻布、シーツなどに織布

^{*3} 引用は以下も含めてすべてカール・マルクス『資本論』第一巻第一章「商品」、翻訳は、今村仁司、三島憲一、鈴木直一訳、筑摩書房版による

3.3 単純な価値形態

市場経済は商品と貨幣の交換であって、物々交換（商品同士を直接交換すること）ではない。しかし、商品貨幣説による貨幣の生成の論理展開にとって、ある特定の商品が貨幣になる交換関係の生成を論じることになるので、仮想的な取引として物々交換を想定し、物々交換が実際には極めて困難な交換であることから、貨幣の必然性を説明することを試みる。

単純な価値形態とは次のような二人の間の物々交換モデルである。ここでは、商品 A の所有者が商品 B との交換を求めている関係を想定する。したがって、商品 B の所有者が商品 A との交換に合意しているかどうかは問わない。

x 量の商品 A = y 量の商品 B

x 量の商品 A は y 量の商品 B に値する。

この等式は数学でいう恒等式^{*4}ではないし、数式や文字式でもない。この等式は、商品 A の価値を商品 B で表現し、商品 B の使用価値が商品 A の価値表現の材料として機能する、ということの意味している。これまでの商品についての説明をふまえると、この交換に関わる商品の諸要因には次のようなものがある。

- 商品身体の可視的な領域
 - － 使用価値
 - － 価値（交換価値）
- 交換の背後にある労働（交換当事者にとっては不可視）
 - － 具体的有用労働
 - － 抽象的人間労働

上記のような四つの要因が、二つの商品（A と B）それぞれに含まれるから、全部で 8 つの諸要因が絡み合うことになる。前回説明したように、この商品の生産に投じられた労働量（労働時間で測られた抽象的人間労働の量）によって規定されるが、交換過程では、誰も商品に投じられた労働量の全体がどれだけの大きさであるかを正確に知ることはできない。^{*5}もし、投下労働量が分かるのであれば、労働量（労働時間）を尺度として、等しい労働量を含む商品同士を相互に交換するということになってよいのだが、このようなことは不可能であるから、実際の交換は、上記のように、他の商品の使用価値の一定量で表現する以外にないのである。

この等式を現実の物々交換にみたててみた場合、次のようなことになる。

1. 商品 A の所有者の交換欲望を表現した価値等式である。
2. 商品 A の所有者は「自分は商品 B が欲しい」という欲望をもっている。
3. 商品 A の所有者は「商品 B を y 量欲しい。もし提供してくれる人がいれば、自分が所有している商品 A を x 量提供してもよい」と思っている。

^{*4} たとえば、 $a+a=2a$ という式は、 $2a=a+a$ のように左辺と右辺を入れ替えても成り立つ。しかし価値形態では左辺と右辺は、まったく異なる機能をもっており、価値形態の「等式」では、左辺と右辺の入れ替えはできない。

^{*5} 誰も知ることができないのに、商品価値を規定する要因が労働だと判断することができるのか？思想や理論、あるいは学問（ぼくはこの言葉があまり好きじゃない）は、知ることが困難なことを知るために挑戦する人間の営為である。誰もが常識や経験で知ることができる範囲で物事の本質が理解できるのであれば、理論や思想は不要だろう。逆に、常識や経験の範囲でしか物事を考えない理論や思想は、わかりやすいが無意味な存在である。

4. 商品 B の所有者は、もし自分が商品 A を欲するのであれば、これを手に入れることができる力をもっている。
5. 他方で商品 A の所有者は、どんなに商品 B を欲しいと思っても、これを手に入れられる力を持っていない)

商品 A は、商品としての交換割合を商品 B の使用価値の一定量で表示している。このような商品 A のような位置にある商品を相対的価値形態と呼ぶ。他方で、商品 B のように自己の使用価値の一定量が他の商品の価値を表現するための手段として用いられるような場合、このような商品を等価形態に置かれた商品と呼ぶ。商品 A の使用価値は、価値を実現する（交換を実現する）ための手段である。商品 A の所有者は、商品 B の所有者に交換してもらえようとして自己の使用価値を宣伝するだろうが、彼/彼女自身が必要としているわけではない。逆に、商品 B については、その使用価値が欲せられており、この意味で、商品 B は社会的ニーズのある商品なのだが、同時に、その使用価値は商品 A の所有者にとって有用な利用対象であるだけでなく、その使用価値は、商品 A の交換割合（価値）を表示するという役割も果たす。

これらの商品の交換が実現されるとすれば、それは、主観的には、商品 A の所有者が自分の欲望を基準に交換比率を決めているにすぎない。だから、このような交換が単に、一回限りのもので、他には起きないような場合であれば、主観的な交換欲望によって交換比率が決まると考えてよいだろう。しかし、このような交換が社会的にしかも多くの人々によって行われることになると、これは単純な主観的な交換欲望だけに左右されるのではなく、社会的な商品の生産（供給）と消費（需要）を支える構造的な条件に規定されることになる。このような社会的な条件の根源にあるのが、人々の経済活動＝労働である。市場の交換は、主観的な欲望の世界だが、その背後にはこの欲望を繰り返し社会的に充足できるような労働がなければ、何一つ人々の欲望（必要と言い換えてもいい）も満たせない。

商品 A をたとえばリネンとし、商品 B を上着とする例を挙げている。つまり、
上着 1 着 = リネン 20 ヤール^{*6}

これは、上着の所有者が「リネン 20 ヤールが必要なんだよ。もし提供してくれるなら、ぼくの上着一着を交換に出せるよ」という意思表示だ。ここでは、上着の価値がリネンの 20 ヤールという量で表示されていることになる。物々交換のマーケットで上着を交換に出している売り手が、上着の値札に「リネン 20 ヤールとの交換を希望します」と表示していると想定してみるとわかりやすいかもしれない。

そのうえで、マルクスは次のように述べている。

たとえば、価値物としての上着がリネンに等置されることによって、上着に潜む労働はリネンに潜む労働に等置される。ところで、上着を作る裁縫の労働は、たしかにリネンを作る織布の労働とは異なる種類の具体的労働ではある。けれども織布の労働との等置は裁縫労働を、事実上、二つの労働のなかで現実に等しいものに、つまり人間労働という両方に共通する性格に還元する。

「価値」という概念は、一般に、価値を持つモノそのものによって単独に示されることはできない。たとえば、あなたが自分の性格の良さをアピールする場合、性格の良さについての自己評価がひとりよがりでないためには、あなた以外の人たち（友人であったり家族であったり、あるいは就職を希望する企業の人事担当者などだが）が「確かに！あなたのその性格はすばらしい！」と評価してくれなければならない。そうでない限り、あなたの良い性格という「価値」は現実のものにはならない。

^{*6} ヤール。織物の長さの単位。3 feet, 36 inches, 0.9144m に相当

同様に、市場においても、商品の価値も使用価値も、その所有者が「自分の商品はこんなに素晴らしい！」と自慢しても、それだけでは「価値」の評価にはならない。その商品を他の人たちが「確かに素晴らしい！だから欲しい！」とってくれると交換を申し込むことがなければならない。ただし、市場経済における価値は、それが社会的な構造としての根拠を持っており、その根拠が抽象的人間労働という個々の市場経済の主体の主観を越える労働に根拠を持つということである。

マルクスの経済学の難しさは、人々の個々の交換行為がそれぞれの人々の主観に依存すると同時に、この主観だけを頼りにして交換のメカニズムを分析することはできず、人々の主観を越えた（主観や実感ではとらえられない）経済の「構造」とでもいうべきものを視野にいれて分析しなければならないということなのである。このような構造を明かにすることが、社会理論の重要な使命である。

しかし、この主観的な価値表現とその背後にある労働との関係は、実はやや複雑な相互関係をもっている。次のようなマルクスの説明はこの複雑な関係を示している。

なんらかの物の属性は他の物との関係から生じるのではなくて、そのような関係のなかで確認されるにすぎない。だからこそ、上着もまたその等価形態、つまり直接的交換可能性というその属性を、ちょうど重さがあるとか暖かさを保つといった属性とまったく同じように、生まれつきもっているかのように見えるのである。ここから等価形態の謎めいたところが生まれる...

上着の所有者はリネンとの交換を求めている。リネンそのものの使用価値は、シーツとして利用できるといった性質を物の性質として持っているだけでなく、こうした物の性質には見出せない市場における特殊な性質を上着の所有者から与えられる。つまり、「リネンには、上着と交換することが可能な性質がある」という社会的な性格である。このような性格は、市場経済（この場合は物々交換なので、厳密には市場経済とはいえない）が与えたものであって、交換という経済行為が存在しないところではありえない性質である。

ところが、市場経済（交換経済）のなかで生活している人々にとっては、あたかもリネンという物には、「上着と交換可能な性質」があたかもリネンの持つて生まれた性質であるかのような錯覚とでもいうべき理解をもつようになる。このことは、貨幣分析にとって非常に重要な観点である。みなさんも実際の経験はないとしても「知識」として、貨幣が金貨や銀貨といった貴金属であった歴史を知っていると思う。金そのものには貨幣になる本性のようなものが備わっていると思われてきた歴史がある。しかし、このような金や銀の貨幣としての機能は、市場経済の発達の中で社会的に構築されたものであって、物質そのものに内在するわけではない。

3.4 分析者の視点と当事者の主観

経済現象を分析する者は、同時に市場経済に参加する経済主体でもある。だから、分析者の視点で論じる場合と当事者の経験や主観に基づいて論じる場合を区別することが時には非常に難しい場合が生まれる。たとえば、マルクスは次のように書いている。

人間の労働力は、裁縫労働の形態でも織布労働の形態でも支出される。だから二つの労働形態は人間労働の一般的属性をもっており、したがって特定の場合、たとえば価値生産の場合には、この観点の下でのみ考察できる。こうしたことはすべて、なんら神秘的なことではない。

上の引用部分は労働価値説に即して、上着を生産する労働とリネンを織る労働がともに労働時間で測ることができる（相互のその大きさを比較できるということ）抽象的人間労働としての側面を持っていること、この抽象的人間労働の側面からこの二つの商品の「価値」が規定されるのだ、ということ述べている。これは、

市場経済を分析的に論じている部分であって、経済活動を担っている人々が実感的に経験できることとはいえない。特に、自分の行っている具体的な労働の時間を具体性を取り除いて（「抽象化」ということ）織布生産のため投じられた労働時間と量的に比較するということは、交換の取引に際して、明示的に自覚されるとは限らないだろう。むしろ「欲しい」とか「欲しくない」といった欲望の動機が大きな意味を持つにちがいない。さらに、上着を縫うためのミシンなどの機械や道具にも一定の労働が必要だが、こうした間接的な投入労働量に至ってはますます想起されることすら稀であろう。後にもるように、こうした労働という経済活動に替えて、貨幣の支出である費用の意識が支配的になる。労働ではなく、商品を生産するために費やされた貨幣的な費用である。経済学は一般にこうした意味での貨幣で評価された費用には大きな関心を寄せるが、そもそものような社会であれ、経済は人間の活動＝労働によって担われている、という大原則はむしろ忘れられがちになる。

上記の引用文に続いてマルクスは次のように述べている。

けれども商品の価値表現においては、事態はねじ曲げられる。たとえば布を織る行為が織布としての具体的形態においてではなく、人間労働としての一般的形態においてリネン価値を形成するという事態を表現しようとするれば、リネンの等価物を生産する具体的労働である裁縫労働が、抽象的人間労働の目に見える形での顕現形態としての織布労働に対置されることになる。（略）

裁縫労働という具体的労働が、区別なき人間労働をそのまま表現するものとみなされることによって、この労働は、他の労働、つまりリネンに潜む労働と同等であるという形態をもつことになる。したがってその労働は商品を生産する他のすべての労働と同じ私的労働であるにもかかわらず、やはり直接的に社会的な形態をおびた労働となる。またそのゆえにこの労働は、他の商品と直接に交換可能であるひとつの生産物のなかに自己を表現する。こうして私的労働がそれとは反対の形態、直接に社会的な形態をおびた労働になる...

「事態はねじ曲げられる」というが、どのようにねじ曲げられてしまったのだろうか？上の例示を思いおこしてみよう。

上着1着＝リネン20ヤール

商品交換は、その背後で商品の生産と消費の構造によって可能になる。交換の場面と労働の関係をマルクスは上の引用で「裁縫労働という具体的労働が、区別なき人間労働をそのまま表現するものとみなされる」とのべている。「みなされる」というこの受身の文章では、「誰によって」が明示されていないが、これは、あきらかに交換の当事者ではなく、分析を加えている「私たちによって」というふうに解釈すべき部分である。マルクスの価値形態論では、取引当事者の実感や主観に沿った記述と分析者の視点が錯綜しているところがあり、大変分かりにくいという難点がある。また、上記のマルクスの文章には、あたかもリネンの労働が直接そのまま、このリネンを織るために費やされた労働時間がそのまま正味の労働時間として評価されるかのように読める部分がある。しかし、このように解釈することは正しくない。

マルクスは、文字通り個々の労働者が実際に費やした労働時間がそのまま商品の価値の実体量となる、とは考えていない。どれだけの労働量として評価されるのかは、常に交換を通じてしか確定しないのである。（極端な場合、売れ残れば、評価はゼロとなる）同時に、交換比率は、生産に投じられた労働量によって規定される。労働と商品交換の関係は、「原因と結果」の関係にはなく、相互に原因となり結果となる関係である。ところが、労働価値説とは、商品の価格の大きさの「原因」が投入された労働にあり、価格はその「結果」であるというように誤解されることがたびたび起きる。このような誤解を前提にして、労働価値説を否定する議論もまた多い。しかし、労働価値説は因果関係のような単純な論理構造をとっていないことに留意すべきである。

【補論】商品に限らず、どのような出来事（事柄）も原因と結果は単純ではないが、出来事を理論的に分析するときには、どうしても単純化して考えてしまいがちだ。単純化することで、物事がクリアに理解できることもあれば、逆に、物事を安直に捉えて本質を見失うこともある。

原因と結果の関係の複雑さは、たとえば、自然科学でも医学のように人間の心身を対象とする分野では様々な議論されてきた。病気の原因を、身体に求める身体原因論もあれば、精神的な状態にもとめる心因論もあるし、心の状態と体の状態が相互に符合しあうとみる心身平行論という考え方もある。人間の有機的体は心と体が環境と接して相互に関わりあうことで病気が発生するとする心身相関論や、これをさらに発展させた「ゲシュタルトクライス」論などもある。喉が腫れたのは扁桃腺炎が原因だったとしても、扁桃腺が炎症を起こしたのは、実は何らかの精神的な（心理的な）要因によることがあるということを入科医で精神科医でもあるヴァイツゼッカーは指摘している。^{*7} 市場経済の場合、商品の価格（価値）の実体は投下労働であるとしても、それがどれだけの大きさの社会的労働なのかは、交換を通じてどれだけの価格として実現されるのかに依存する。ところが価格の大きさは、投下労働の量に依存する。相互に依存するのだが、しかし、単に相互にもたれあっているのではなく、独立に機能する部分もあるし、一方の変化によって他方が大きく影響されることもある。数学の方程式を解くように、すっきりした答えはここにはない。全体を相互に関わらせながら記述する以外にない。この点がマルクス経済学が難解であると言われるゆえんである。

3.5 拡大された価値形態から一般的な価値形態へ

上記のような商品 A と商品 B との間の交換関係のモデルは、二人の登場人物の間の取引だが、市場全体を視野に入ると、このような交換関係が多数、様々に行われていることになる。例えば、次のようなことになる。

- 商品 A の所有者 z 量の商品 A = u 量の商品 P
- 商品 B の所有者 y 量の商品 B = t 量の商品 Q
- 商品 C の所有者 x 量の商品 C = s 量の商品 R

このように、市場では（ここでは、物々交換で表示されている）多くの商品の売り手が自分の欲しい商品に対して、自分の持っている商品の一定量を交換に提供したい、という意思表示の無限のリストの全体によって構成されることになる。このように、二者間の交換関係を複数リストアップした交換関係を拡大された価値形態と呼ぶ。こうした物々交換のフリーマーケットが広場で行われているところを想像すれば容易にわかるように、実際にこれらの交換を実現することは大変苦労するだろう。

物々交換モデルの場合に、このモザイクというかパズルのような交換モデルが効率的に人々の欲望を実現するように機能するにはどうしたらいいだろうか？ 解決方法は、多くの売り手が欲しがる商品があれば、これが手がかりになる。

たとえば、この物々交換の市場で比較的多くの人たちが「商品 F が欲しい」と考えているとしよう。このように多くの人たちから欲しがられている商品 F の所有者は、他の商品所有者よりも交換を実現できる可能性が高まる。あなたが、物々交換のフリーマーケットに出店しているとしよう。マーケットを見渡して、多くの人が商品 F を欲しがっていることがわかったとしよう。このような場合、「自分は特に商品 F が欲しいわけではないが、商品 F を入手しておけば、自分が欲しい商品を獲得できる確率は高くなる」と考えることは、合理

^{*7} V. v. ヴァイツゼッカー『病因論研究』a、講談社学術文庫、木村敏の解説による。

的な判断だといえる。もし、そうなら、あなたは、本当に欲しいものを手に入れるための差し当たりの手段として、まず商品 F と交換することを考えるだろう。このような発想がさらに多くの人たちに広まると、ますます商品 F を交換対象として求めることが広がっていくことになる。たとえば、多くの人たちがリネンを欲しがっている（自分で使うためであれ、交換の便宜として理容しようという意図をもっていようとどちらでもいい）とすると

一着の上着 = 20 エレのリネン

10 ポンドの茶 = 30 エレのリネン

40 ポンドのコーヒー = 25 エレのリネン

半トンの鉄 = 50 エレのリネン

...

ということになる。ここでは、市場を想定しているが、市場だけでなく、たとえば、政府が税を徴収する時にリネンで徴収したり、政府による財政の支出をリネンで行うといった政策をとれば、ますますリネンは多くの人たちに必要とされることにもなる。こうなれば、リネンは、市場で、あらゆる商品から交換を求められ、したがって、リネン所有者は市場のどのような商品とも交換可能となる。この様な機能をまとったリネンを一般的等価形態にある商品と呼ぶ。これは、私たちの通常の経済用語でいえば「貨幣」と同等の機能を果たしているといっているものになる。

3.6 貨幣形態と欲望の変容

貨幣とは、上でとらえずリネンのように一般的等価形態に位置づけられる商品のことである。実際の歴史的な市場経済においては、一般的等価物の位置につくことができる商品は、貴金属、特に金と銀であった。貨幣の機能（その詳細は後に述べる）をまとった商品は、トランプのジョーカーのように、市場ではどのような商品とも交換可能なオールマイティの札として機能できる。市場の特権的な地位を得た貨幣は、同時に市場で活動する誰もが欲しがるものになる。しかし、この貨幣への欲望は、その物の使用価値のために「欲しがる」のではなく、何とでも交換できるという特別な性質のために欲しがられることになる。

一着の上着 = 2 オンスの金

10 ポンドの茶 = 3 オンスの金

40 ポンドのコーヒー = 2.5 オンスの金

半トンの鉄 = 5 オンスの金

...

しかも、金や銀が装飾品などで有用な役割を果たしている時は貨幣とは呼ばれないのであって、金や銀の物としての有用性への欲望とは関わりなく、市場経済における特権性の故に求められる。こうして、市場経済においては、物々交換モデルには見出せない重要な変化が人々の意識、とりわけ「欲望」の心理あるいは人格的パーソナリティに生じる。物々交換では、その物の使用価値への欲望であって、そこには一定の限界がみられた。リネンを欲しがる人は、それをベッドのシーツに使うなどの具体的な用途のために必要としていた。欲望とは、この意味で、一定の限界をもつものであった。ところが、貨幣が存在することによって、市場ではもう一つの欲望が生じる。それは、量的に無限の欲望である。貨幣は無限の欲望対象として、「もっと欲しい」「いくらあってもいい」存在となる。

このことは、単に、個人の欲望のありかたに重要な影響を与えるだけでなく、社会の基本的な構造に深く

影響を及ぼすことになる。たとえば、自分の住居の必要のために森林の木を伐採して家を作る場合、一軒の家を建てられるだけの木材があれば十分であろう。しかし、貨幣を得ることを目的に住宅を販売する者は、なるべく多くの住宅を売ろうとするから、際限なく森林資源を消費する可能性をもつことになる。市場経済は、資本（次回以降に詳しく定義を述べる）の活動によってこうした貨幣目的の活動が全面展開することになる。経済は成長するのが当たり前という考え方は、市場経済のなかで貨幣が果たす欲望の変調にともなって登場したものだ。自然環境に余裕があった19世紀ですら、都市部の環境問題は深刻だった。現状はもっと深刻である。しかし、市場経済それ自体には成長を抑制するメカニズムは存在しない。このことが、世界規模の環境破壊、武力紛争をもたらす一つの重要な原因になっている。

金や銀など貨幣となる貴金属にも一定の社会的労働が投下されているから、上記の各種商品と金との交換関係は、それぞれの商品と金に投下されている労働量によって規定されることになる。金の生産には金坑での採掘労働や金貨として鑄造するための労働などが含まれることになる。こうした労働の実体と市場における商品交換の関係は、次項以降でより立ち入って考察することになる。